企画展　森鷗外ゆかりの洋画家
小堀 四郎

小堀四郎≪恐山の月≫　1975年　油彩・カンヴァス
豊田市美術館蔵

会期：2026 年 4 月 25 日 (土) ～ 6 月 15 日 (月)

＊一部水彩画やペン画などは、会期途中で展示替があります。

【開館時間】9:30 ～ 18:00（入館は 17:30 まで）

【休館日】毎週火曜日（5 月 5 日、5 月 6 日は開館）5 月 7 日

【主催】島根県立石見美術館、しまね文化振興財団、
山陰中央新報社、日本海テレビ

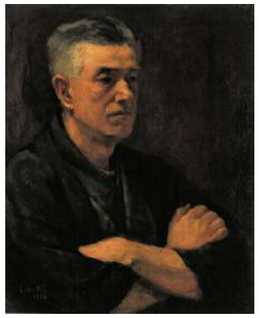
【特別協力】世田谷美術館、世田谷文学館、豊田市美術館

【後援】　芸術文化とふれあう協議会

【観覧料】
［企画展］一般 1,300 (1,040) 円 / 企画展・コレクション展セット 1,500 (1,200) 円
大学生 800 (640) 円 / 企画展・コレクション展セット 930 (740) 円
小中高生 400 (320) 円 / 企画展・コレクション展セット 400 (320) 円
［前売券］企画展・コレクション展セット　一般 1,200 円、大学生 700 円、小中高生 300 円
＊(　) 内は、20 名以上の団体料金　＊各種障がい者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方、およびその介助者（1 名まで）は入場無料。＊前売券はオンラインチケット「シマチケ」（WEB サイト）でお求めになれます。

小堀四郎≪二人で歩いた厳しい道≫　1987年　油彩・カンヴァス
豊田市美術館蔵

「人生は勇気と忍耐を以ての自己との戦い、孤独との戦いである。」（小堀四郎）



小堀四郎≪中勘助像≫1939年
油彩・カンヴァス
豊田市美術館蔵

小堀四郎≪冬の花束≫1946年
油彩・カンヴァス
豊田市美術館蔵

小堀四郎≪死≫　1941年　油彩・カンヴァス
世田谷美術館蔵

小堀四郎≪誕生≫　1942年　油彩・カンヴァス
世田谷美術館蔵

小堀四郎≪イタリアの少年≫
1929年　油彩・カンヴァス
豊田市美術館蔵

小堀四郎≪妻の像≫1949年　油彩・板
豊田市美術館蔵

右：≪無限静寂（宵の明星一信）≫　1977年　油彩・カンヴァス ／中：≪無限静寂（深夜の星一望）≫　1977年　油彩・カンヴァス
左：小堀四郎≪無限静寂（暁の星一愛）≫　1977年　油彩・カンヴァス　いずれも世田谷美術館蔵

小堀四郎（1902 年－98 年）は、尾州徳川家に九代仕えた旧家で漢学者・小堀休忠の四男として、愛知県名古屋市に生まれました。東京美術学校（現・東京藝術大学）では特待生に選ばれ、5 年のフランス留学を経て滞欧作を発表するなど、将来を嘱望されていましたが、1935 年の帝展改組に伴う美術界の混乱に失望。恩師・藤島武二の**「画壇の悪風に染まるな。芸術は人なり、まず人間を作れ」**という教訓を得て以後、画壇との関わりを絶ちました。主な出品は年 1 回、東京美術学校の同期生で結成した上杜会のみとし、生涯団体に属さず、絵を売ることもせず、無名のまま孤高の道を歩みます。藤島の媒酌で結婚した妻**小堀杏奴**（森鷗外次女）は、彼の芸術を深く理解し、夫を支えながら随筆家として活躍しました。本展では、小堀が名声にこだわらず自らの芸術を貫いた人生を振り返り、物事の本質を追求した創造性の高さに着目いたします。その美への純粋な眼差しは、情報化社会で迷いの多い現代を生きる私たちの心を強く揺さぶります。今回は結婚前の杏奴がフランス留学時代に描いた油彩画や、夫婦共通の恩師・長原孝太郎、藤島武二の作品など、小堀四郎の芸術に深い影響を与えた人々の作品もあわせて紹介いたします。

小堀四郎　写真提供：世田谷美術館

◇みどころ◇

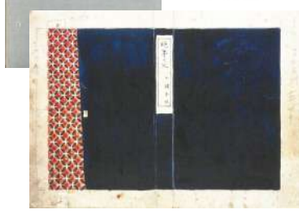
❶小堀四郎の画業の全貌を一堂に紹介する個展は、実に十四年ぶり。しかも、本展はここ島根県立石見美術館だけの開催となります。出品総数は、油彩画を中心に関連作品や資料を合わせて約 240 点で、うち四郎の油彩画は約 120 点です。そのなかには幅約 4m ある大作や、100 号を超す作品が多く、とても見応えがあります。世俗から離れ、ひたすら独自の画風を切り拓いてきた小堀四郎。その唯一無二の芸術世界が揃って見られる機会です。

❷小堀四郎の東京美術学校時代の恩師であり、妻の杏奴も若い頃に絵を習っていた長原孝太郎。そして「芸術は人なり」と説いて、四郎の人生に大きな影響を与えた藤島武二。夫婦ともに関わりが深かった、日本近代洋画の巨匠二人の名作もご覧いただきます。

藤島武二《大山岬に打ち寄せる怒涛》1932 年
油彩・カンヴァス　三重県立美術館蔵

「私が最も尊敬するのは文学では父（鷗外）、絵画では夫である。」（小堀杏奴）

❸小堀杏奴は、夫四郎と出会う前、絵画を学ぶために弟の類とともにフランスに留学しました。帰国後、当時絵を教わっていた藤島武二に、優秀な若手画家４人のなかから自分に代わる「絵の先生」を選ぶよう促され、名も知らなかった四郎を選びます。やがて行き来するうちに自然な流れで結婚。夫の圧倒的な才能を前に絵筆を握らなくなった杏奴は、随筆家として活躍します。
父鷗外について書いた代表作『晩年の父』（1936 年・岩波書店）では、13 歳で亡くした父の晩年を振り返り、愛する父母の実像に触れ、話題作となりました。また夫や子どもたちとの慎ましくも穏やかな日々を語った『朽葉色のショール』（1977 年・春秋社）。絵の師であった長原孝太郎や藤島武二らとの思い出を綴った『追憶から追憶へ』（1980 年・求龍堂）など、数多くの書物を著しました。
こうした本の装幀や表紙絵の多くを夫四郎が担当しています。
本展では、小堀杏奴の滞欧時代の油彩画やスケッチブック、四郎が描いた杏奴の本の装幀画案など。貴重な作品や資料も数多く展示します。



上：小堀杏奴『晩年の父』 1936 年　岩波書店刊　当館蔵
下：小堀四郎　装幀原画　小堀杏奴著『晩年の父』 世田谷文学館蔵

上：小堀杏奴《椅子の上の静物（赤い陶器等）》1933 年頃　油彩・カンヴァス　世田谷文学館蔵
下：アトリエの小堀夫婦　写真提供：世田谷文学館

島根県立石見美術館　IWAMI ART MUSEUM
〒698-0022 島根県益田市有明町 5 -15　島根県芸術文化センター「グラントワ」内
TEL0856-31-1860（代表）/FAX0856-31-1884（代表）　担当：左近充（学芸）上野（広報）
https : //www.grandtoit.jp　E-mail : grandtoit@cul-shimane.jp

島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

＊関連イベント情報などグラントワの HP で随時お知らせして参ります。